

Title	ローレンス・ストーン エリザベス朝の海外貿易
Sub Title	
Author	宇治, 順一郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1951
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.44, No.10 (1951. 10) ,p.620(68)- 622(70)
JaLC DOI	10.14991/001.19511001-0068
Abstract	
Notes	論文紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19511001-0068">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19511001-0068</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ツールーズへのイングランド産毛織物の輸出は一四一三年から三七年の間に特に著しかつた。これ以前はフランスやブラバン産の毛織物に壓倒されてツールーズの全輸入量の多くを三〇%が精々であつたが、この時期には全體の五〇%以上を占めるといふ躍進振りであつた。然し一四三八年から五〇年の間にはノルマンディーやラングドック産の毛織物に凌駕されている。但しこれはフランス國産品進出による相對的低下であつて、供給の絶對量は實は漸次増加していたのである。

(渡邊國廣)

ローレンス・ストーン

『エリザベス朝の海外貿易』

(Lawrence Stone, "Elizabethan Oversea Trade,"  
The Economic History Review, 2nd Series, Vol.  
2, No. 1, 1949. pp. 30—58.)

II

エリザベス朝の商業は經濟史研究の分野に於ける重大な盲點の一つとなつてゐる。それ以前の時代即ち第十五世紀及び第十六世紀初頭について既に近くはパワー、ポスタン更に當てはシャンプ等により幾多の優れた業績が提示されたに反し、この時代については殆ど何らの解明も行はれてゐない。それは決して

エリザベス朝初期の海外貿易には二つの重要な性格が窺はれる。その第一は、二百年以前と比較した場合、海外貿易の内容が甚だしく變化を來してゐる點である。第二は、戰爭財源に金を蓄積すべき時代であるのに、當時貿易額は一〇萬ポンドを超える逆調を示してをり、その原因が全く外國商人によつて齎らされる贅澤品にあつたことである。

先づ輸出面に於いて、往時その九五%を占めて王座にあつたのは羊毛と羊毛皮であつたが、當時はこれが一〇%以下に落

ち、代つて毛織物が七五%を占めてゐた。他に鉛と錫が共に五%弱である以外にいふべきものはない。従つて輸出に於ける毛織物の獨占的地位、ひいてはかの農業革命と工業化の顯著な趨勢が認められる。

これに對し輸入の方は遙かに複雑であつて、支離的といひ得る商品はなく、(一)亜麻糸とその原料が一七%、(二)毛織物工業及び染色工業の原料即ち油・大青・茜草・明礬が一三%、(三)葡萄酒一〇%、その他雑多な副食品とか鑛産物とか贅澤な織物等々があつた。これ等の大部分は氣候その他の關係からイングランドでは生産不可能のものであると共に上中階層の要求する品々であつた。従つて初期の海外貿易は、單一生産物たる毛織物と極めて雑多な諸商品との交換に外ならなかつた。敢ていへば、貿易收支は全ヨーロッパ大陸諸國の購買力如何に依存し、若し毛織物の輸出が一〇%でも變化すれば貿易バランスも完全に逆轉せざるを得ない運命にあつたのである。

しかも右の輸出入品は當時の大中心市場であつたアントワープを経由するものが多く、全體の三分の二は一度そこを送られ残餘はフランス(主としてフルーアン、ラ・シェル、ポルドー)とスペインに向つた。そしてこの場合、商品の移動及び賣買に當る者は殆んど凡て外國人であつて、イングランドの商人の果たした役割は極めて受動的なものに過ぎなかつたのである。このやうな大陸諸國への依存に加へて、フランス商品(贅澤品)を

買ふ場合は主に地金を流出せしめねばならなかつた。ここに逆調となる抑々の因が潜んでをり、これの補正手段としては、フランス以外の地域で毛織物による優位を保持すること以外にはなかつた。以上が初期の大體の状態であつた。

III

W・R・スコット教授はエリザベス朝の貿易を分析し、短期・中期・長期の波動を検出してゐる。もし初期について行つたと同程度に他の年度についても解明し得るならば、吾々はスコット教授の業績を検討しこれを評價することが出来る筈であるが、残念なことに根本資料からの轉寫と整理が未だそれまでに進捗してゐない。ただ末期に關しては、不完全であるとはいへロンドンの輸出入統計があるから、これに他の斷片的資料を加味すれば、長期波動については或程度吟味を加へることが出来る。然しこの場合、多くの商品が數量的に表はされては居るだけであつてそれ等の價格は不明であり、ために初期で行つたやうに各品目相互間の比重を把むことは出来ない。ただ初期に比較した品目の異同とか或ひは各々の量的増減を知ることが可能である。こゝにはこの點から若干の推測を加へる。

先づ輸出から見ると、初期にはなかつた新しい工業製品が若干現はれてゐる。最も著しいのは新織物類(薄羅紗・靴下等)であり、他に鑛鐵製品・麥酒・石炭等も重要性を増してゐる。

然しこれらは何れも貿易の趨勢を變質せしめる程のものとはいひ難い。他方に於いて初期には重要な輸出品であつた鉛や錫は減少し、結局毛織物地のみが依然として最も重要な輸出品であつた。次に輸入品では、嘗て最も重要な濫費の對象であつた亞麻糸・同原料・亞麻布・帆布等が三割方減少し、更に鐵產品就中大青の如きは十分の一度になつてしまつた。これは要するに當時國內に移植し生産することが可能なものの輸入が減つたことである。加ふるに綯具(船舶用)砂糖(精製用)羊毛(フェルト帽子用)等新興工業の原料は輸入増加を示してゐる。従つて政府が濫費品の輸入による濫費を抑制し或ひは自給を達成すべく新産業を創設し、以て貿易收支を平衡せしめんとした努力は或程度成功したと考へることが出来よう。然し他方に於いてこれと逆行する現象もあるから(乾燥果實類・ファスチヤン織・葡萄酒の増加、油・香料の減少)、右の傾向を過大に評價し直截的な判定を下してはならない。

四

通例エリザベス時代はイングランド貿易の擴大期でありその活動の勢からぬ部分が西歐以外の地方に向けられるに至つたといはれ、その證據として輸出入額の増加、取引先の變化、外洋商船隊の建造等があげられてゐる。いかにも輸出入額は確かに増加してゐる。然しその原因は輸出面では新織物類、輸入面では

は贅澤品にあつた。従つてこの時期に新しい工業發展も行はれはしたが、それは貿易に質的變化を齎したものでなく、一般國民の生活水準を高めたものでもなかつたのである。又取引先の變化といふ事實も、アントワープの破壊に對處して直接消費地との結びつきを圖つた結果再調整が行はれたものにすぎない。従つて英商人は進出し、その限りで大船の建造も行はれたが、他方に於いて小船舶は著しく減少してゐるから、直ちに輸出額を増大せしめたといひ得るかどうか頗る疑問であつて、英商人の進出に積極性を認めるのは寧ろ困難である。要するに一見異常な發展であるかに思はれてゐるこの時代の變化は、凡てアントワープの破壊に對應せんとした受動的な努力の現はれに外ならず、アムステルダムと興隆に至る間隙を利用して英貿易が擴大することは出来なかつたのであつた。通説はもはや敬虔なる神話にすぎないのである。(宇治順一郎)

ウィリアム・ミラー

『アメリカの指導的實業家の出自』

(William Miller, "The Recruitment of the American Business Elite." Quarterly Journal of Economics, Vol. 64, No. 2, May, 1950. pp. 242-253.)

一 序論

アメリカの指導的實業家の出自に關する著名な研究(Tarsitis, F. W., and Joslyn, C. S., "American Business Leaders: A Study in Social Origins and Social Stratification." N. Y., 1932. は心理的及び發生的分析に全く欠けてゐるので、その結論はかゝる複雑な問題に關する信用すべきものと云ふ事が出来ない。併しミラー氏の研究によると、一九一〇年代のアメリカの指導的實業家のうち、下層の移民及び貧農の子弟の出自は僅か三%に満たず、大部分はよりよい身分の出である。以下に於て、アメリカの指導的實業家の社會的性格と一般の人々の其との關係を、心理的・發生的角度から分析してみる。

二 國民的・人種的及び宗教的出自

一九〇〇年に、全人口の一二%を占めた白人以外の者——黑人、インディアン、メキシコ人、東洋人——で指導的實業家になつた者は無い。南歐・東歐人及びその子孫からも、又南米・アジア・アフリカ人からも皆無である。ユダヤ人は全人口の1%程度であるが、指導的實業家になつた者は六名で、いづれも排他的・同族的枠の内部に於てのみ高い地位を獲得した。一九〇〇年迄に大企業と重要な經濟分野とから大企業間以外のものが排除されて了つた事は注目し得る。

一九〇〇年度國勢調査によれば、指導的實業家の兩親の双方又は一方が外國生れである者は一九%。一般に五〇歳の白人男

子のうちアメリカ生れの者は五〇%強であるのに對して、指導的實業家の兩親と彼等自身がアメリカ生れの者は約八〇%である。又彼等の七九%は英國系で、一般人口のそれ(一七九〇年に七四・一%、以後は減少す)より多い。即ち、彼等は一般人口に比して、古くから土着した英國系の者が多い。

併し宗教に就ては事情が幾分異なる。即ち、中産及び下層階級の多いプロテスタント諸派——メソヂイスト及びバプティスト——に屬する者と、身分のよい者の多い諸派——監督派及び長老派——に屬する者の割合(一八五〇年度國勢調査による)は、一般人口の場合、五三・二%對一九・一%、指導的實業家の場合は、一四%對四六%(確實な推定を加へれば一七%對五五%)、換言すれば、彼等の所屬宗派は一般人口の其よりヨリ貴族的・上流的である。カトリック及びユダヤ教は共に少ない。

三 地理的及び社會的背景

彼等の國民的・宗教的繼承物と共に、彼等が育つた直接の環境もその生涯の方向を定めるのに重要であらう。彼等は農耕地方からではなく、多くはより古い商工業地帯から出た。即ち一八五〇年、アメリカ生れの白人及び自由黒人の分布は、新英蘭一、中部大西洋岸二八%(合計三九%)、中央東北部二五%、南部三一%、西部五%であるに對し、アメリカ生れの指導的實業家の分布は同じく夫々、二〇%、四一%(合計六一%)、